



私は主に美術とダンスの批評を、大手資本が経営する以外の場所で行っている。2011年3月以降、細分化した分野の越境の願いを込めて企画を行っている。今年の2月には美術と音楽の競演、舞踏とコンテンポラリーダンスの競演、そして今回の、専門ではない写真のグループ展を開催した。

様々な切り分けられた「分野」の会場に足を運ぶと、息が詰まる。自分と似た人間を求めて、闘争ができないのは、アーティストではない。その思いと共に、ほんの小さな出会いを求めるアーティストとめぐり合えることがある。その想いを少しでも拡大できればと考えている。

加藤英弘とは舞踏の大野慶人、あらゆるダンスを考察する及川廣信の元で出会った。高島史於と知り合う切掛けはダンス批評を行い自らも踊る長谷川六だった。寺崎誠三はステップスギャラリーで知り合う。本橋松二は横浜の専門学校の非常勤講師として同僚だった。谷津栄紀はステップスギャラリーの吉岡まさみの紹介による。つまり、異なる場所で知り合った方々に参加を呼びかけ、実現したのだ。断られた方も多数である。その方々には次回にお願いするつもりだ。

今回本橋は巨大な作品を1点、谷津は中型の作品を2点と小品を6点、加藤は中型の作品2点と小品2点、寺崎は中型の作品を5点と小品2点、高島は中型の作品を5点と小品5点を出品した。いずれもデジタルプリントである。

被災地を携帯カメラで撮影した本橋のカラー、ひたすらシャッターチャンスを待ち続ける谷津のカラー、加藤は加工した/しないカラー、寺崎は偶然性を呼び起こすモノクロ、高島は必然性のみにより偶然を受け入れるモノクロと、それぞれが全く異なる様相を呈したにも関わらず、互いが画廊内で共感し、共鳴し、反発することなく、同時に調和を起さずに自らを主張した。私は幾度となく画廊に通ったのではあるが、その度にここに展示されているのが写真に見えなくなったり、写真にしか見えなかったりする。アナログからデジタルに移行した写真が何でもできる、と発想するのは怠慢である。ここに集った作品は、写真であるが故に写真を超克しようという、個々の意志が秘められている。すると絵画は、版画は、彫刻は、映像は何かという問題提起が生じていった。

1日(金)にはシンポジウムも開催した。私は写真が専門ではないので単なる写真展にしなくなかった、現代美術専門の画廊で展示することの意義、現代美術が写真をも飲み込み巨大化していることへの危惧などを話したが、五者とも当然のこととして自らの手法と体験を来場者に語った。

今回の出品の条件はアナログからデジタルへ移行を乗り越えた者、仕事を持ちながら制作を行っている者であった。すると自ずと団塊の世代若しくはその上下ということになった。シンポジウムの来場者も同世代が多かった。私は50歳以下の写真を含めた現代美術に期待が高まった。

